

Stephane A. Dudoignon, Komatsu Hisao, Kosugi Yasushi eds. 2006. *Intellectuals in the Modern Islamic World: Transmission, Transformation, Communication*. Routledge. 375 pp.

刺激に満ちた労作集である。異なる地域にありながら、西洋的近代に触れたムスリム知識人が、イスラーム復興に向けていかに苦慮し、工夫したかが細やかに描かれている。各地で個別に進展したと思われがちなイスラーム復興運動が、実は1898年から1935年にわたって刊行されたエジプトの雑誌『マナール *Al-Manār*』からの直接的・間接的な影響を受け、知識人同士のネットワークを構築し、思想的に共鳴していたのであった。本書は『マナール』誌の持つ現代的意味を再検討したうえで、『マナール』誌に呼応した各地での共振が、20世紀を通して活発化したイスラーム復興運動の端緒となったことを考察している。そしてこのような成果が日本人研究者を中心に発信されたことは、わが国のイスラーム研究が水準の高さの証左であることは言うまでもない。

本書は、イスラーム地域研究プロジェクトによって開催された2回の国際シンポジウム、“The Lighthouse of Modern Islam: *Al-Manār* (1898–1935) Revisited” (1998年)・“Intellectuals in Islam in the Twentieth Century: Situations, Discourses, Strategies” (2000年)における報告をもとに刊行されたものである。

本書の構成は以下の通りである。

本書は大きく2部構成になっている。第1部は *Al-Manār in a Changing Islamic World* と題され、イスラーム復興において中心的役割を果たしたアラビア語雑誌『マナール』誌の再評価である。続く第二章は *Intellectuals in Challenge: Situations, Discourses, Strategies* で、『マナール』誌に関連した事例を含めつつも、イスラーム世界における知識人層の形成や彼らの言説を考察したものである。第1部には以下の論考が収載されている。

- 小杉泰「『マナール』誌再訪——イスラーム復興の『灯台』」
- デイヴィッド・カミンズ「1898年から1920年の『マナール』誌とシリアにおける民衆宗教」
- マフムード・ハッダード「マナリストと近代主義——導火線となる社会と宗教への試論」
- 粕谷元「トルコのイスラーム主義への『マナール』誌の影響——メフメト・アーキフの場合」
- ステファン・A. ドウドワニョン「ロシア帝国のムスリムにおける『マナール』誌の反響——リザーウッディーン・イブン・ファハルッディーンと『シューラー』誌 (1908–1981) に関する予備研究ノート」
- 松本ますみ「中国ムスリムにおける愛国心の合理化——雑誌『月華』への中東の影響」
- アジュマルディ・アズラ「『マナール』誌の復興主義のマレイ・インドネシア世界へ継承——『イマーム』誌と『ムニール』誌の場合」

続く第2部は以下の論文で成る。

- ステファン・ライヒムート「1907年におけるアラブ＝イスラーム立憲思想——アブドゥル・カリーム・ムラード (1926年没) と彼のモロッコ憲法草案」
- ラジャ・アダル「越境するイスラームの構築——シャキープ・アルスラーンによる東西を結ぶネットワーク」
- アレクサンドル・ポボビッチ「20世紀ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおけるムスリム知識人

——継続と変化」

- 子島進「社会開発と宗教的知識——パキスタン北部におけるイスマール派の変容」
- フランソワーズ・オバン「ナショナリズムの翼を得たイスラーム——中華民国におけるムスリム知識人の場合」
- 小松久男「ムスリム知識人と日本——汎イスラーム主義の仲介者アブデウルレシト・イブラヒム」
- デイル・F. アイケルマン「文化の衝突？——知識人、大衆、そしてイスラーム」

まず本書に収載されている各論について概観したい。

小杉論文は、20世紀後半に世界的に興ったイスラーム復興に多大な影響を与えた『マナール』誌の再評価を試みるものである。論者はまず、イスラーム復興運動が伝統の墨守ではなく、「覚醒」という表現を用いられる点を指摘し、ザカート導入を具体例として紹介している。すなわち、ザカート導入そのものは伝統の復活の範疇に入るが、ザカートを集める方法に近代的な制度、すなわち近代国家の枠組みの中に制度としてのザカートが導入されていく点で、伝統的な社会とは全く異なってくるのである。このような近代性を持ち込んだイスラーム制度の推進を、イスラーム復興として捉えるとき、論者は『マナール』誌とその活動家たち（マナリスト）の再検討の重要性に至るのである。本書の多くの論考が示すように、『マナール』誌の影響は世界各地のムスリム知識人に届いたのであった。そしてその流れはムスリム同胞団に継承されるなど、20世紀後半のイスラーム復興のうねりの原動力となったのである。

言うまでもなく、イスラーム復興の動きは19世紀以前に見られた。だが論者は、宗教復興を出版によって多くのムスリムに知らしめた点で、『マナール』誌の重要性を指摘している。論考ではラシード・リダーの主張を引用し、ムスリムとしての自覚やサラフィー主義、スンナ派、イジュティハード、反タクリドなどについて理論的な枠組みを構築する上で、『マナール』誌の功績を評価している。ウンマの団結、イスラームと近代文明の協調、イスラームの本源への回帰、イスラーム法におけるイジュティハードの行使と現代社会への適用、クルアーンの現代的な解釈など、『マナール』誌で築かれた基礎理論が、その後20世紀を通してイスラーム復興に多大な影響を与えたのである。ここで論者がリダーを研究者のみならずジャーナリストとして評価している点は重要である。『マナール』の重要性は、一冊の著作による新たな復興理論構築とは異なり、わかりやすいことばで、イスラーム復興の基礎理論をより多くのムスリムに共有させたことにこそ、草の根的な復興運動の基盤を生んだといえるのである。

小杉氏は『マナール』誌の主導的立場にあったアブドゥとリダーの役割についても考察を加えている。すなわち、イスラーム改革における3人トリオと呼ばれるジャマルッディーン・アフガーニー、ムハンマド・アブドゥ、ラシード・リダーの役割について再検討を試みている。従来の研究ではアフガーニーがサラフィー主義に息を吹き込み、アブドゥがそれを頭脳となって理論化し、リダーが広報を務めたとされてきたが、本論では、リダーの役割は広報以上のものであったと評価している。その根拠として、『マナール』誌に掲載されたクルアーン解釈の分析を行っている。同誌上でのクルアーン再解釈はアズハル大学におけるアブドゥの講義が基になっているが、論者は講義録と『マナール』誌掲載分の比較により、リダーによるコメントが掲載されている点や、アブドゥ没後、リダーがこれを引き継いだ点からも、『マナール』誌におけるリダーの役割の積極的な再評価を行っている。同様に、リダーに対する評価において、彼が大衆的支持を得ず、非現実的な言論

活動を行っていたという批判についても、むしろ、リーダーの思想がムスリム同胞団のような後発の復興運動を導いた意味で、同時代的な評価を与えるよりも、彼の時代に対する先行性を評価する。さらに論文は、リーダーが自身とその仲間を、「イスラーム改革において均衡のとれたパーティー」と命名した重要性を検討している。これは後にカラダーウィーによって中道派と名づけられた概念である。マナリストによるイスラーム復興が近代との均衡を意識しながら、メディアを用いて進展したという点について、その再評価はイスラーム復興運動が一定の成果を見た 21 世紀初めの現在にこそ行われるべき作業であろう。

『マナール』誌の再評価は、単にその称賛に留まっていたは新たな地平は見られない。デイヴィド・カミンズ氏の論文は、マナール誌の影響がなぜシリアで限定的であったのかという点を論じている。そこではオスマン帝国のスルターン、アブドゥルハミード 2 世がスンナ派を公的な宗教として用いて、自身の権威づけにおいてスーフィズムを利用したことに対するマナール派の批判が都市部の保守層の支持を取り付けることができなかった点にあると指摘している。リーダーと知遇のあったシリア人アブドゥルハミード・ザフラヴィーが 1901 年に記したスーフィズムと伝統的な法学に対する厳しい批判や、ダマスカスのジャマルッディーン・カーズィミーによる聖者廟参詣批判などが、スルターンやその助言者であるサイヤド・アルフダー・サイヤディーとマナール派の対立に強く関連していた。それは、マナール派の運動家たちが西洋の列強に支配されないための科学や技術面での発展にはイスラーム復興が不可欠であるとの認識を抱いていたことに基づいていた。『マナール』誌がイスラーム復興にとっての場として機能していたことを、シーア派によるムアーウィアに対する批判や追悼文などの事例を紹介しながら実証している。論文では、マナール派が活発な論戦を展開しながらも、シリアで限定的な影響に終わった背景について、同派の主張を詳細に検討しているが、スーフィズムを日常生活に取り込み、イスラーム復興に対し消極的なシリアの保守的宗教観をさらに検討する必要があると結んでいる。

続くマフムード・ハッダード氏の論文は、マナール派の思想的変容について論じている。一般にマナール派とサラフィー派を同一視する主張もあるが、論者は両者が一致しない点や、マナール派の思想自体が、時間的な変化とともに変容している点を、アブドゥルハミードの論考を引用しながら指摘している。そこでは、西洋的近代教育を受容しながらも、イスラーム復興のあり方を模索する知識人の知的な動態が浮かび上がってくる。

マナール派は、西洋的近代との相克においてイスラーム復興を志向したが、粕谷論文では、オスマン帝国における同派の影響を、代表的な知識人の言説をもとに再検討している。論者は『マナール』誌が発行された時代、オスマン帝国の知識人は西洋主義者、イスラーム主義者、トルコ主義者の 3 派に大別されるとし、各派を全般的に見渡している。また例えばイスラーム主義者はさらに伝統墨守派や近代主義者、あるいはその中間などのグループに分かれることや、トルコ主義者がトルコ在住のグループと、ロシアからの移住者のグループに分別されることなどを指摘している。同論文ではイスタンブール出身のイスラーム主義者でトルコ共和国国歌の作詞者メフメト・アーキフに焦点を当ててマナール派の思想的影響を検討している。アブデュルハミード 2 世の専制にあって、彼は禁じられていたアブドゥルの教えを紹介し、トルコにおけるイスラーム復興の主要な役割を果たした。本論でさらに重要な点は、伝統墨守派と近代主義者などの分類を行いながらも、そこに議論の余地があることを指摘している点である。アーキフ自身、アフガーニーやアブドゥ、リーダーらの影響を受けつつも、「新オスマン人」からも強く感化されていた。

続くステファン・ドゥドワニョンは、ロシアにおける『マナール』誌の影響を、同地の知識人リザー

ウッディーン・ファハルッディーンがタタール語で刊行した雑誌『シュエラー』誌を通して考察している。ロシアにおけるマナール派の影響は、ロシア革命後のマドラサ閉鎖(1918-1919)に至るまで、アズハルに学んだムスリムらによって伝えられていた。この時期、ロシアでは1905年の第1次ロシア革命の影響を受けて、近代化の波に乗って『マナール』誌がロシアで普及する基盤が出来上がったことは興味深い。かくして、『シュエラー』誌はアズハル出身者らの思想を紹介しつつ、ムスリムの近代化の議論の場として機能したマドラサを結ぶネットワーク構築に貢献したのであった。

松本論文は、20世紀前半の中国において、少数派であるムスリムが、雑誌『月華』を通してイスラーム復興を目指しながら、多民族国家中国に対する愛国心をいかに両立させたかを詳細に検討したものである。同論文は、中国のムスリムが存在一性論を継承しつつも老教の思想を受け継ぎ、儒教とイスラームの並立を可能としたことで、ムスリムが少数派として共存しえた状況を明快に示している。特に、中国のムスリム社会におけるアホンの位置について、彼らが宗教的権威を持ちながらも、土地を所有しないため、モスクやマドラサの運営は喜捨などに頼っており、ゆえに漢民族社会の経済活動に依存する点が高かったことなど、現実的な要因が指摘されている。中国のムスリムは中国人としてのアイデンティティと、少数民族としてのアイデンティティの両方を確立させ、中国人としてのアイデンティティは国民国家の樹立を可能とし、民族アイデンティティは、多民族国家の共存を可能とするのである。中国のムスリムは、「愛国愛教」という教えがハディースに存在すると信じ、これが中国のムスリムの国民国家への帰属の根拠となっていた。日本が民族自決権を根拠に中国人ムスリムに対し、独自の国家建設を促したにもかかわらず、南京政府の出版許可を得た『月華』は、多民族主義を賞賛し、中国人ムスリムの抗日運動参加につながったのである。ムスリムの間では、抗日運動をジハードとする論調が見られるようにさえなった。

さらに同論文は、1931年にアズハルに留学した中国人ムスリムが、同地から『月華』に投稿するようになり、その雑誌の構成が『マナール』誌に酷似している点を指摘して、同年が中国のイスラーム復興にとって画期的であったとする。同誌にはアラビア語の論考の翻訳が掲載されるようになり、従来の老教で通じていた存在一性論に、特にエジプトからの新たな影響が加わったのである。1933年の同誌の表紙は、灯台が描かれるまでに至っている。

松本氏は同誌への投稿者馬堅がアブドゥの著作を翻訳して『月華』に掲載した理由について、リダーやアブドゥらが、タウヒードについて簡明に解説しており、これが初心者には大変理解しやすいと述べた部分が掲載されているが、新たな思想の提供ではなく、草の根的にイスラーム復興を目指した『マナール』誌に対する率直な評価として重要であろう。

アジュマルディ・アズラの論考は、『マナール』誌の東南アジア、特にマレー・インドネシア地域に対するイスラーム復興の影響が、同誌に掲載された記事からの直接の影響のみにとどまらず、出版という手法そのものにおいても強く影響を与えた点を指摘している。同地では、『イマーム』誌や『ムニール』誌など、誌名からして『マナール』誌の影響をうかがわせる雑誌が刊行され、アラブ文学のみならず、マレー文学の拠点ともなったのである。『イマーム』誌の読者は都市の知識層やマッカに留学した者たちが中心であったが、各地に支部を持つまでに至った。さらには、『イマーム』誌の関係者は、「マナールの民 (kaum al-Manār)」と呼ばれるほどになったのである。論者は同誌により宗教教育が改革され、近代教育が進められた点を評価する。これはイスラーム世界全体が直面し、変化を余儀なくされていた時代に、マレー地域において、欧化主義ではない、宗教復興を選択した一例として重要である。一方1911年にハージー・アブドゥッラー・アフマドによって創刊された『ムニール』誌は、その名が『マナール』を想起させるほど、『マナール』誌の趣旨を

踏襲したものであり、それはすなわち、『イマーム』誌の継承でもあった。この雑誌の特長は、伝統墨守派による改革派に対する批判を避けるため、よりバランスの取れた内容を求める声が読者のあいだで高まったことを反映しているという点にある。同誌は、日常的な問題、すなわち金曜礼拝時の説教を、よりわかりやすくするために現地語で実践すべきであると説くなど、草の根的な復興運動を展開したのであった。

同論文ではさらに粕谷氏の分析同様、マレイのムスリムが2つのグループに分かれていたことを紹介している。すなわち、若手の改革者と年長の伝統主義者である。このうち前者がマナール派の影響を受けたが、アズハルに学んだシャイフ・ムハンマド・ターヒルは、知人らと共に1903年にマッカとカイロに招待されている。このことは、本書にしばしば言及されている、イスラーム世界におけるネットワークの構築を示している。同論文では、マレイの地にありながら、現地のムスリム知識人がイスラーム世界としてのネットワークを意識していた事例がいくつも紹介されている。雑誌においてトルコが西欧列強に取り囲まれているなどの最新情報は、軍や教育の近代化を意識させることとなっていった。また、雑誌での論調は、当初トルコのスルタンの賞賛が続けていたが、「青年トルコ人」によるスルタン批判が西洋による流言でないことを知ると、「青年トルコ人」を支持するようになっていった経緯によって、マレイでの復興運動における主張が時代とともに変容したことを紹介している。

第2部は、ステファン・ライヒムート氏によるモロッコにおける立憲思想の研究で始まる。先行研究では西欧と非西欧の立憲運動に関する比較研究があまり進展していない点で、本論文の提供する視点は重要である。論文は18世紀初めのオスマン帝国の官僚が、帝国のディーワーンをヴェネチア・スタイルの議会制評議会に移行させようとしたところから、軍隊のヨーロッパ的な近代化の提案を紹介する。19世紀の北アフリカやアジアでは、立憲に関わった都市部の行政官たちがヨーロッパへの留学経験を持っている場合があった。そして20世紀初めのトルコ、イラン、エジプトなどにおいては、イスラームの枠組みで立憲システムを構築しようとする動きが起こっていたのである。論者はそこでモロッコの事例を検討していくが、当時のモロッコは、イギリス、フランス、スペインが経済進出を図っており、1904年の秘密条約で、フランスとスペインがモロッコ分割を定め、イギリスのエジプト領有を認めるかわりにモロッコ獲得を画策したのであった。この西欧列強の進出は、スルタンに対する宗教学者の批判を招くこととなった。

このような状況下で立憲に関する提案がなされたが、論者は、モロッコで教鞭を執っていたレバノン出身のアブドゥル・カリーム・ムラードに焦点を当てる。中東の著名人と交流のあったムラードは、モロッコで近代的初等教育を開始したが、そこにリダーとの強い共通点や日露戦争での日本の勝利、イラン立憲革命の影響を見出している。1905年、『マナール』誌にはモロッコ危機に関する匿名の報告が掲載されているが、論者はこれをムラードの書いたものと推定し、近代教育に対する関心の高さが現れているとする。彼は日本やイランの近代的な立法システムを披瀝しながら、二院制による国会の設立を提唱し、クルアーンに基づくことを前提に、多数決の導入を提案した。論者は、これらの見解とリダーが『マナール』誌において展開したシューラーの相似を指摘している。ムラードはまた立憲にあたっては、イランのようにシャリーアに基づきつつ、内外の支持を得る方法でなされるべきであるとの見解を示している。また憲法は万民に理解されるよう、簡明なことで書かれるべきだとも主張した。論者は、ムラードが提唱した成文法による立法制度が、当時法官(qādi)が支配的であったイスラーム世界において画期的なものであったが、これが後のイスラーム世界でも運用されることとなった点を強調している。



続くラジャ・アダル氏の論考は、各地のムスリム知識人を結んだ、レバノン出身の反植民地主義活動家、シャキーブ・アルスラーンの存在について詳細な検討を行っている。アルスラーンは「雄弁の貴公子」の称号を持ち、イスラーム復興の論考を発表した人物として知られている。

ドゥルーズ派の名門に生まれたアルスラーンは16歳のとき、バイルートでアブドゥの薫陶を受け、リーダーの盟友としてイスラーム復興を呼びかけた。彼の活動の特長は、フランス語雑誌『アラブ民族 *La Nation Arabe*』を刊行し、スイスに基盤をおいて世界各地のムスリムと交流したことである。フランス語による雑誌刊行は、ヨーロッパ在住のムスリムにイスラーム復興を伝えるうえで大きな役割を果たし、「欧州ムスリム会議 *European Muslim Congress*」と連携し、汎アラブ主義、汎イスラーム主義の意識を高めた。同誌は1930年から38年までに計38巻を刊行した。その内容は『マナール』誌に通じるもので、アブドゥの学窓を思わせるものである。盟友リーダーとは生涯を通じての交際だったが、1915年、リーダーらアラブ民族主義者がオスマン帝国に反対したとき、トルコの国会議員であり、民族を超えた団結を求めたアルスラーンは、このときだけはリーダーと対立したという。多民族主義や多言語主義を主張し、国境を越えたムスリムの団結を主張するアルスラーンについて論者は、彼の生い立ちや生育環境における多民族的状況が反映されているものと述べている。彼はサウディ国王から政府高官やヨーロッパ駐在大使就任の話を受けるが、これらに関心を示さなかった。むしろ彼は統一アラブを理想とし、国境を越えたウンマを志向していたのであった。その国際性は、スイスに移住した時の友人がレバノン独立後最初の首相になるなど、政治的に重要な役割を果たしたことなどにも現れている。

論文は、アルスラーンのヨーロッパ各地での活動を考察していく。ドイツでは政治家としてのみならず、天才文学者として熱烈な歓迎を受けたという。その結果、ドイツの対中東政策にはアルスラーンの影響が色濃く反映されていたという。またイタリアについては、1930年から33年の間、アルスラーンはリビアの抵抗運動を受けてイタリア批判を行っていたが、34年からはイタリア支援に転向、ムッソリーニに接近することとなった。彼の活動はその後東欧でも続いたが、これらの活動について論者は、東欧と中東のムスリムを結び、越境するムスリムとしての意識を生もうとしたと指摘する。かくして、ジュネーヴで1935年に欧州ムスリム会議が創立され、アルスラーンが議長を務めた。

欧州ムスリム会議のユニークな点として、論者はその議題がムスリムの日常生活に関わることを含んでいる点を挙げている。モスク建設や子供の教育など、ヨーロッパで少数派として暮らしながらムスリムとしていかに生活すべきかを議論するあたりは、草の根的なイスラーム復興の顕著な例であろう。また従来のアルスラーン研究がアラブ東域における彼の活動を中心に成されてきたのに対し、本論ではマグリブにおける彼の活動についても、モロッコの青年層との交流などを描出している。モロッコでは、フランス語で刊行された『アラブ民族』がひそかに流通していたのである。

かくして、論者はアルスラーンの構築したネットワークは、アラブ民族主義の知的潮流と、イスラーム主義、反植民地主義を結びつける役割を果たしていたと評価するのである。また、彼のネットワークの重要性は、人々を結びつける機能的価値のみならず、ウンマという概念をより具体化させることに成功した点にあると位置づけている。

ラジャ・アダル氏のアルスラーン論により、東欧のムスリムがアラブ世界と結びつく過程が紹介されたが、アレキサンドル・ボボヴィッチ氏の論考は、20世紀を通してのボスニア＝ヘルツェゴヴィナにおける約50名のムスリム知識人の総括的な、貴重な情報に満ちた考察である。一口に東南欧といっても、アルバニア、ブルガリア、ギリシャ、ハンガリー、ルーマニア、旧ユーゴなど、異な

る歴史的、政治的背景が存在するなか、それぞれの地域でのムスリム知識人のあり方も様々である。本論はこれを簡潔かつ包括的にまとめた数少ない論考である。

論文は、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナにおけるムスリム知識人層の動態を時系列でまとめ、これを1878年から1945年、1945年から1990年、1990年以降の3つの時代に区分している。さらに他の論文での考察同様、近代化に対するムスリム知識人の対応を、伝統墨守派、近代主義者に分類している。第1期はオスマン帝国末期から第2次世界大戦が終了し、ユーゴスラヴィアが建国されるまでの期間を扱い、第2期は共産主義時代の終焉までに設定されている。第3期は、共産主義時代後から現代までを扱うが、この時期には、ムスリムが民族浄化と呼ぶ、1992年から95年まで内戦期をも含む。なお論者は第1期の初め、1878年を、オスマン帝国が終わった年としている。

第1期の伝統墨守派は一般的にイスタンブールやカイロに暮らした経験を持つ者があるという。これに対し近代主義者の中には、比較的穏健な知識人と、現地のムスリム宗教コミュニティとの接触を持たない完全な世俗主義者に分かれ、さらには、この両者の間 (in the middle) に立つ「新近代主義者」というべき存在があるという。これに対し第2期に入ると、チトーが主導した非同盟諸国への参加の中で、ムスリム知識人層の中に、自らのコミュニティを意識化させるという、従来にない動きが発生し、これが政治的、社会的、宗教的に新たな可能性を生むこととなった。論文では、この知識人層のなかに、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ連邦共和国内でのムスリム民族の可能性を訴えた政治指導者のグループ (Muslim Communist political leaders) や、ユーゴスラヴィアの共産党政権に近い世俗的なムスリム知識人 (secular Muslim intellectuals)、さらにその下位グループとしての左翼ムスリム、あるいは共産党政権に反対する世俗的ムスリム知識人などの潮流があったことを指摘し、その代表的な人物を列举している。これらの動きは冷戦終結後の第3期に大きな変化を生み、政治的傾向を強めたグループや神学研究者などを生んだが、世俗的なムスリム政治家の中には、このようなグループ間を行き来する存在も少なくなかったという。傍から見れば節操がないように思えるが、複雑な政治状況下の一世紀を生きたこの地域のムスリム知識人のなかに、時代によってその主張を変えた者が出たであろうことは自然なことである。むしろ、そのような人物を網羅的に紹介する作業がいかに困難であるかが察せられるところである。

さまざまなムスリム知識人の傾向を紹介したうえで、論者は、社会、政治、イデオロギーなどあらゆる不可避の条件が重なり合ってグループ間の対立を生み、それが継続されつつも変容してきたが、そこには常にムスリムを民族として認知させようとする動きがあったと指摘している。この地域のさらなる研究には、19世紀後半より刊行されていたムスリムによる新聞、雑誌の分析が必要であることを強調して論文は終わっているが、その時期はまさに、『マナール』誌の時代と重なる。書評子としてはこのあたりをぜひ知りたかったところだが、今後の研究成果を待つことにしたい。

ムスリムが少数派にあって、自らの存在を政治的、社会的に主張する動きがみられる一方で、ムスリムの中の少数派が、自派をいかに活性化させ、多数派の中で存続するかという動態もまた、イスラーム復興の流れの中で位置づける必要があるだろう。子島論文は、パキスタン北部地域でNGO活動などを展開するイスマール派の社会開発について、フィールドワークで得た貴重な情報をもとに、少数派としての生き残りの工夫が、むしろ地域開発の主流へと変容した過程を描きだした貴重な報告である。

パキстанは約40万人のイスマール派を抱えるが、これは最大都市カラチで商業を営むホジャ派と北部山岳地域に住むグループに大別される。北部地域のイスマール派においては、ピール(導師)の存在が宗教的権威を保ち続けてきたが、英領期の1922年、ボンベイにいたイマーム、

アーガー・ハーン3世が同地域の開発を始め、1946年には学校(Diamond Jubilee schools: DJ 学校)建設を指導した。論文では当時の様子をインタビューをもとに描いているが、この地域のピールは、毎年ボンベイのアーガー・ハーンを訪ね、ザカートを納めるとともに、宗教的指導を受けていた。彼はイギリスが建てた学校に学び、DJ 学校の教師となって、教育者として地域の近代化に貢献した。教育開発はパキスタン独立後も継続され、1980年代には教育を受けた相当数の青年指導者が育っていた。彼らはワーイズ(説教者)として、ピールに代わって宗教的指導を実践するようになっていく。ワーイズたちは山から山、村々を移動し、アーガー・ハーン言葉を、ジャマーアト・ハーナと呼ばれる集会所に集まる住民に対し、現地語でわかりやすく解説していたのである。これは識字率が低いであろう地域において、宗教教育が人間の頻繁な移動によってなされていた例を示すものである。本書の他の論文が、メディアを媒体としたイスラーム復興に注目しているのに対して、山々を駆け抜けるバイクという現地ならではの手段を紹介している点で非常に面白い。厳しい自然環境や低識字率など、啓蒙運動の推進に対する種種の阻害要因を克服して、遠隔地ボンベイのイマームの言葉を、若きワーイズたちが伝道する様子は、草の根的なイスラーム復興の事例として貴重な記録である。それはまるで、リーダーらの主張が新聞や雑誌、留学生らの移動を通して伝えられたことと類似している。ただ、『マナール』誌との相違は、マナリストがイスラーム復興のメッセージを等しく水平的に共有したのに対し、イスマール派はイマームの言葉を上意下達式に伝えるシステムが構築されたという点である。このシステムを効率的に機能させるために、パキスタンのイスマール派全体の方向性を決定するフェデラル・カウンシルが作られ、この下にリージョナル・カウンシル、さらにローカル・カウンシルが設けられて、ジャマーアト・ハーナはいずれかのローカル・カウンシルに所属することとなったことは、イスマール派の統制を高めることに成功している。また、パネルと呼ばれる長老組織は、ジルガとも呼ばれるもので、地域での細かな争いを解決する役割を果たし、NGO 活動での発展が、イスマール派コミュニティの自治性を高めた上、これをパキスタン政府が公式に認めているという事実は、注目すべきであろう。論者は、組織化された自発的な参加に基づいて構成されたコミュニティが、「市民社会」的な要素を持っていると指摘する。

さらに論文は、11世紀のイスマール派のペルシア語誌人で旅行記作家のナースイレ・フスラウに関する研究が進み、イスマール派が、自派の文化的アイデンティティへの誇りを持つようになっている点を指摘している。書評子に関心を持ったのは、ここで紹介されているフスラウ研究の学会や論文の題目が、パキスタンでの国民的詩人イクバル研究での事例に酷似している点である。研究活動での詩人研究の主題設定が、およそ類似したものになるであろうことは想像に難くないが、「詩聖」をいかに扱うか、という手法が垣間見られて興味深い。ただし論者は、イスマール派コミュニティの自覚と発展は、イスマール派以外のグループとの差異を意識化させることになっている点にも触れ、社会開発がもたらす効果のさまざまな側面を紹介している。数少ない資料とフィールドワークでの調査を交えて織り成した本論文は、イスラーム世界の諸相における社会開発と宗教復興の関連を考察する上で重要な情報を提供している。

フランソワーズ・オバンによる中国ムスリムの研究は、前出松本論文と時代的にも、扱う資料も重なる点が多いが、松本氏が中国ムスリムの言説にみられる愛国心の正当化に焦点を当てているのに対し、オバン氏は中国のナショナリズム高揚におけるムスリムの役割を、特に組織活動や出版活動の動態から、印刷媒体の活用の効果や意義について詳細な検討を加えたものである。論文はまず中国語でのムスリムの呼称などを紹介し、1905年に中国で近代化されたムスリムのための学校が



創立されて以降、ムスリムの団体が設立されるようになったが、特に1920年代後半には、上海や南京で盛んに設立された。これが30年代に入ると、政治色を帯びるようになっていった。論文はそれぞれの団体と活動家について細やかに解説し、中国ムスリム近代化の過程を浮き彫りにしている。

ここで注目すべきは、1939年に設立された回教文化研究会である。これはその前年の38年に東京に設立された回教研究所を想起させる出来事である。当時中国ムスリムが日本に学んでいた経緯を考えると、日本と中国で時を同じくして設立された研究機関の連関性の有無について考察する必要があるだろう。

小松論文は、20世紀初めに来日し、日本の政治家らと交流をもったトルコ人アブデュルレシト・イブラヒムを軸に、日本とムスリム世界を結ぼうとした汎イスラーム主義の動きを解明しようとするものである。

渡日前のイブラヒムはロシアによる対ムスリム政策を批判した最初のロシア人ムスリムでありながら、ムスリムの教育改革を実践すべきだと主張していた。彼はタタル語とアラビア語で新聞や雑誌を発刊し、1907年には「自治」と題するエッセイでカザフやトルクメニスタンの領土的、文化的自治を訴えた。その後イブラヒムは中央アジアから満州、日本、韓国、中国、東南アジア、インド、アラビア、トルコを廻り、その旅行記をタタル語の新聞に掲載した。のちに『イスラームの世界』の表題で刊行された旅行記について論者は、ユーラシアに広がるムスリム世界の現状をムスリムに伝える、啓蒙的な役割を果たすと共に、西洋列強の進出の中で、ムスリムの解放を探りつつ、その役割において日本への期待を抱いたと指摘する。

1909年2月から4カ月余にわたったイブラヒムの日本滞在の様子について、小松氏は彼の旅行記と当時の日本の資料から紡ぎだしている。イブラヒムは日本の政治家らと積極的に交流し、日本の新聞も彼を採り上げていた。彼は日本の近代的教育制度の充実に強い感銘を受け、同時に、和魂洋才という発展の選択を賞賛した。独自の伝統と精神性を維持しつつ、西欧の科学技術を受容する方法を、ムスリム社会に適応すべきであると考えたのである。それは、急速な西洋化によってイスラーム的伝統が没落する様子をまじかに見たが故の見解であった。また彼は、日本でのキリスト教宣教師の活動を厳しく批判し、ムスリム知識人が、キリスト教に反対するだけでなく、宣教団の活動の脅威を訴えた。

イブラヒムはさらに、北アフリカから東南アジア、東アジアに広がるムスリム世界の地政学的重要性を強調した。彼は特に中国ムスリムが日本の最良の同士となるとして、両者の接近を試みた。彼は日本の道徳観や倫理観がイスラームのそれと通底するものと考えており、日本人のイスラーム改宗を期待したが、同時に、日本人は政治経済的な関心がなければ改宗しないであろうとの現実的な予測も行っていた。彼は日本の大東亜主義者との接触を通してアジア議会設立の報に接し、中国やトルコでアジア議会について語った。トルコではアジア議会について講演し、絶賛された。イブラヒムが伝えた日本に対する肯定的な印象はトルコのムスリムの間で知られるようになった。だがその一方でトルコではトルコ民族主義が台頭し、中国ムスリムは、イブラヒムの期待に反し、「愛国愛教」のもと抗日運動を展開するなど、イブラヒムの意に反する状況が起こっていた。それでも彼は汎イスラーム主義を主張し、政治活動や第一次大戦期のムスリム兵士調達などに奔走した。彼はロシアでレーニンやスターリンにロシアにおけるムスリムの存在を主張したが、オスマン帝国が滅亡し、アタチュルク主導の新体制が確立すると、彼の活動は制限され、自宅で軟禁状態となった。彼が再来日を果たしたのは1933年、日本で右翼による強硬路線が台頭し始めていた時期であった。

彼の「ジハード」と題する論文は、ムスリムが日本と協調していくべきとの主張を展開している。論者は、彼の汎イスラーム主義と日本の拡張主義が合致した経緯を紹介している。彼は1938年の東京のモスク開設や、大日本回教協会設立にも立ち会い、東京で小規模の研究会を持ち、少数の雑誌を刊行していた。

論者は、ムスリムと日本の接近というイブラヒムの抱いた夢が、想像の共同体ではなかったか、という問いかけをしている。彼の抱いた構想が夢に終わったことは歴史的事実である。だが、彼が構想したこと自体もまた事実である。彼の時代の汎イスラーム主義が西欧にまなざしを向けていたのに対し、イブラヒムはムスリムのいない日本にムスリムの関心を向けようとしたことは重要である。西洋的近代化の波の中でムスリムとしての自我に目覚め、イスラームの復興を志向したムスリム知識人の中にあって、伝統と近代の両立の在り方を探る一例として、想像の共同体の具体例として非イスラーム社会の日本を選んだことは大変興味深い事例である。

本書を締めくくるアイケルマン論文は、本書を通じて論じられたイスラーム復興におけるメディアのあり方や、イスラーム世界の変容を、現代の状況で論じ、未来への展望を込めている。

アイケルマン氏は、イスラーム世界におけるメディアが近年大きく変貌した点を強調する。その言語はアラビア語にとどまらず、英語、フランス語、ロシア語、カザフ語、ウルドゥー語など多様化し、その文体やメッセージも変容を遂げ続けていることを挙げている。ペルシア語、インドネシア語など、あらゆる言語でメディアが成立していることに加え、インターネットなどのメディアの発達は、遠隔地との交流を可能にし、自身の地元ではあまり知られていないイスラーム学者が、実はインターネット上で世界的に知られている、という事態を引き起こしている状況を指摘している。同時に論者は、現代がメディアの個人や社会に対する影響についてまだ測りかねている時代にあるとして、今後のメディアの役割への注視を呼びかけている。

現代社会における宗教の役割の変化について論者は、1970年代後半までは、一般的に宗教の役割が衰退していたと考えられていたが、その後イラン革命やポーランドでの連帯の運動など、宗教復興が地域的でありながら地域的枠組みを超えた動きになっている点を指摘する。特にイスラームの場合、中央で統括する組織的階級がないために、見解を同じくする人々による緩やかなネットワークが世界規模で広がっており、論者はこの緩やかさが、宗教に対する弾圧にも耐えうる組織的な力を持たせているのではないかと考える。さらに論はハンチントンの文明の衝突に及ぶ。書評子はこれを論ずるほどの能力を有していないが、論者が、文化は明確な思想とイデオロギーを持ちながらも、常にそれらの思想は議論され、改革されているものであるという点を指摘して、ハンチントンの説における文化の首尾一貫性の誇張を批判している点に同意するものである。

論考はその後トルコとシリアの具体的事例を検討していく。トルコの場合、ヌルスィーの思想がいかにしてトルコで受容されたかを、マナリストのアブドゥヤアフガーニーと比較している。その最大の違いとして、アブドゥヤアフガーニーの主張が都市部の知識人層を中心に受け入れられたのに対し、ヌルスィーは近代的科学知識を有しながらも、近代化とはかけ離れた農村部のムスリムへの視点も忘れなかった点を挙げている。彼の著作集である『リサーエ・ヌール』は、トルコ政府による発行禁止処分にもかかわらず、書写版や印刷によって大量に出回ったという。ヌルスィーを継いだギュレンもまた、宗教と科学、伝統と近代の統一などを論じた。彼の運動がトルコ国内に550もの学校を建設させ、教育の近代化に貢献したばかりでなく、運動支持者がトルコの出版、放送業界に多く進出したことで、その社会的影響力を確実なものにしたのであった。興味深いのは、トルコ人のアイデンティティの変化に関する報告で、1992年から94年の間に、自身のアイデン

ティティについて、ムスリムであるか、ヨーロッパ人であるか、あるいは両方であるかという質問に対し、両方であるとの回答が増えているという点である。また回答者の97%が自身をムスリムと意識し、46%は一日5回の礼拝を欠かさないとしながらも、21%しかイスラーム国家を主張していないという結果となっている。これはトルコ人ムスリムのアイデンティティの変容において、個人としてのムスリムのアイデンティティと、政体のあり方との距離を示している点で興味深いが、現代にあつては、他地域でも起こりうる現象ではないかと思われるし、常にその反動の可能性もあることも意識しておかなければならない。

シリアについては、技師ムハンマド・シャフルール作の800ページに及ぶ著作 *al-Kitāb wa al-Qur'ān: Qirā'a Mu'āšira* が、中東地域で大量に出回っている状況を紹介している。同書はサウジアラビアで発禁処分を受けたにもかかわらず、海賊版などが流通している。この書は伝統的なクルアーン解釈に対する疑義を唱えたものだが、伝統的な権威への対立はそれ以外の事例でも見られるようになったという。論者はその事例として1997年にカタルのテレビ局アル＝ジャズィーラが放映した番組で、宗教的権威が討論の場で不利な立場にさらされたことを挙げる。そしてこれらの事例に共通するのは、メディアの役割である。論者は、ギュレンやシャフルールの活動が、ムスリムが多数を占める地域において、公共と宗教の境界を再画定し、伝統的な宗教的権威に対する挑戦を行っているとしている。メディアはイスラーム世界におけるさまざまな動態を共時的に共鳴させる役割を果たすようになったのである。空間や距離という境界が崩れることで、前述のように、地域では無名の人物が世界的なメディアでは著名になるという振れた現象を可能とする。そしてメディアの新たな動きが、ムスリムの新たなネットワークを構築し、イスラーム世界に変容をもたらすというのである。

序文で示されるように、本書に収載された論文は、世界各地のムスリムの動態を、さまざまなディシプリンに基づいて検討している。そして本書に収載されたすべての論文が、イスラーム世界と西洋的近代の接触のあり方を軸として検討している。本書の読後は、イスラーム世界がまぎれもなく西洋的近代の技術、すなわち印刷メディアなどの発展を活かして、共時的に共鳴することとなった点を強く感じさせる。また20世紀初めにあつて、日本、中国、東南アジア、トルコ、中東、ヨーロッパ各地でムスリム知識人が交流しあい、ネットワークを構築していたことは、現代イスラーム世界を理解する上できわめて重要である。『マナール』誌をめぐる世界各地での反応を読むと、アラビア語で簡明に書かれた復興理論が、簡単なアラビア語であれば理解できる中国のムスリムなど、非アラビア語圏のムスリムにとっても多大な影響を与えたことが明らかとなる。『マナール』誌が読みやすい表現で復興理論を構築したことは、復興運動の大衆化への大きな一歩であったといえよう。イスラーム世界が成立する上で、まずは想像の共同体のメタファーとして、19世紀末から20世紀初め、すなわち『マナール』の時代に、世界的に共鳴するムスリム知識人のネットワークが構築されていた。それはアダル氏が説明するように、国家の境界を超えた地球規模の「ウンマ」の創造でもあった。これらの新たな発想を共有させる上で、雑誌媒体がイスラーム復興における「場」となったのであったのである。本書で紹介された中国の『月華』、マレイの『イマーム』や『ムニール』も同様の役割を果たしたといえよう。『マナール』とほぼ同時代の南アジアで、『クルアーン解釈』を著したアブル・カラム・アーザードもまた、アブドゥヤリダーの影響を受けて『アル＝ヒラル』(1912年)を発刊した。「イマーム」「ムニール」「ヒラル」などの雑誌名が、「マナール」と同じ韻律である点は偶然とは思えない。またイスラームを象徴する「ヒラル」と「月華」の類

似性など、本書の各論を読み比べると、地域間のさらなる相関関係の解明が必要に思われる。

本書では雑誌による遠隔地間のムスリム知識人の交流だけでなく、生身の人間同士の交流が詳述されている。そこにはムスリム同士の交流だけでなく、非ムスリムの政治家などとの交流も描き出されている。シャキーブ・アルスラーンがドイツで歓迎され、ドイツの対中東政策に多大な影響を与えていたという指摘は、日本が、遠来の客人イブラヒムをもてなし、日本とイスラーム世界との接点の鍵としたことに似ている。それは、20世紀初めに招かれたインド人が日本の対インド政策に影響を与えたのと同じで、海外への移動がまだ困難な時代に、現地の声を届ける人材を、受け入れ先がいかにか大切に扱ったかがうかがい知られるところである。無論、その受け入れ方には、各国の外交上の思惑があったことは否定できないが、「現地の声」として、生身の人間が伝える情報がいかにか重要であったかが、本書全編を通じて伝わるのである。これに関連して南アジアの事例を一つ紹介したい。1914年、南アジアの都市ラーホールで開催された「イスラーム擁護協会 Anjuman-e Himāyat-e Islām」の集会で、ウルドゥー語新聞『ザミーナダール *Zamīndār*』を主宰していたザファル・アリー・ハーンが、当時ムスリムの覚醒と行動主義をペルシア語とウルドゥー語の詩に託して発表していたムハンマド・イクバル（Muhammad Iqbal）を日本に派遣し、日本人をムスリムに改宗させるべきだとの提案を行った。イクバルは1904年と1905年に、インド・ムスリムの啓蒙雑誌『宝庫 *Makhzan*』（1901年創刊）において、「ムスリムの生活について」と題する論文を発表し、日本の近代教育をインドのムスリムにも適用しようと提言していた。ザファル・アリー・ハーンは、渡航費捻出のため、イクバルの詩集の再版という具体的提案も行った。その場にいたイクバルは、「日本にはムスリムが布教に向かったが、改宗はほとんど成功していない。私にはここ（英領インド）でしなければならないことがあるので渡日しない」と断ったという。この経緯においてイクバルが言及した「ムスリム」が誰であるか特定はされていないが、おそらくはイブラヒムの事であったろう。イブラヒムの日本滞在の話を、イクバルが旅行記や新聞、噂で知ったのか、あるいはイブラヒムが離日後に訪れたインドで知ったのかは不明だが、ムスリム知識人の交流が我々の予想以上に広まっており、共鳴していたことは間違いないだろう。なおイブラヒムがインドで立ち寄ったのはボンベイであった。

なお小松論文で、1938年5月に東京でモスクが建設された経緯が紹介されているが、これに先立つ1935年、神戸に日本初のモスクが建設されていた。書評子のもとに神戸モスク開設時の記念パンフレットがあるが、ここにもトルコ系ムスリム、アズィーズ・アリーや、前述『宝庫』の編集者シャイフ・アブドゥル・カーディルの祝辞も寄せられている点などは、今後詳細な検討がなされるべきであろう。日本人のイスラーム改宗は大きな成果を挙げなかったが、日本を舞台に、あるいは、日本の状況を考慮しながらムスリム知識人が交流していたのである。同様に、既に述べたが、1938年設立の回教研究所（東京）と、翌39年に中国で設立された回教文化研究会については、オバン氏が、中国ムスリムが多数日本に留学し、日本政府が支援していた経緯を紹介しているとおり、日本と中国でのイスラーム研究機関設立の関連性についても検討の余地がある。昨年、ようやく王柯氏による研究成果が発表されている。

さらにかつてのイスラームの伝播が陸路や海路を通じて実現し、西アジアから徐々に広まっていったのとは異なり、20世紀初めのイスラーム復興は、世界各地のムスリムが、直接アズハルに学び、リーダーらの知遇を得て、その復興思想を取り込んだのである。あるいは、マレイの事例のように留学生や旅行者、巡礼者らによって、『マナール』誌が持ち込まれたことも、交通手段の発展という近代化が人的交流の促進とイスラーム復興思想や運動の拡大を検討する上で示唆に富んでいる。



だがここで、南アジアのムスリムの動態を研究する者として、一つの疑問が浮かんでくる。それは、本書に描かれているムスリム知識人たちが、中東の知識人やその雑誌との関わりにおいて、自身の地域でのイスラーム復興を推進したことである。この事実自体に何ら問題はないが、南アジアの場合は状況が異なる。すなわち、アリーガル運動で南アジアのムスリムの近代化を進めたサイイド・アフマド・ハーンや、パキスタン独立運動の政治的指導者ムハンマド・アリー・ジンナー、パキスタン構想の基盤を築いたとされる詩人ムハンマド・イクバルなどに共通しているのは、19世紀後半から20世紀初めにかけて南アジアにおけるイスラーム復興に貢献した知識人のうち、近代主義者とされる人物はみな、当時の宗主国イギリスに学んだ経験を持つことである。インドが他のイスラーム地域と異なり、イギリスの直接支配下にあったことが原因であろうが、では、南アジアの知識人の中で、マッカやエジプトに学んでイスラーム復興を実践した人物はなかったのであろうか。マッカに学んだ18世紀のシャー・ワリーウッラーや、幼少期をマッカで過ごしたアブル・カラム・アーザードなどを除いて、実際はほとんど紹介されていないのが実情である。

だが興味深いことに、南アジアのムスリムが、『マナール』誌の触発を受けていたことを示す事例がある。1912年4月、ラクナウーにあるイスラーム研究機関ナドワトゥルウラマーがリダーを招待し、リダーはそこでアーザードらとの面会を果たしており、その後デーオバンドのダール・ウルム学院をも訪問している。同年6月、アーザードは機関週刊誌『アル＝ヒラル』を創刊させるが、その創刊号には、ラクナウーでのリダーと面会した際の感激を綴り、アフガーニーやアブドゥ、リダーの写真を大きく掲載しているのである。アーザードは、19世紀末から世界各地で広まったイスラーム改革運動が、アフガーニーという個人の功績で拡大し、リダーらがこれを継承していることを高く評価している。アーザードがマナール派の影響を強く受けていたことは明らかであろう。その意味で、『アル＝ヒラル』は、マナール派の流れを汲んでいると言っていい。南アジア近現代におけるムスリム知識人研究は、前述の近代主義者に多くの関心が注がれた。それは彼らがパキスタン独立につながる思想的潮流を代表したためである。しかし、今後はそれら「近代主義者」とも異なる、マナール派と感化しあいながらイスラーム復興を続けたアーザードの『アル＝ヒラル』の論調やデーオバンド学派の研究をさらに深化させる必要がある。

第1次大戦後の1919年、英領インドではオスマン帝国のカリフ制を擁護する目的で反英運動が開始され、「ヒラーファト運動」としてインド全体で広まった。1920年、アーザードは『カリフ論』を著し、ヒラーファト運動の正当化を試みた。彼のカリフ論が今度は1922年の『マナール』誌に連載されたことを小杉氏が紹介しているが、これも南アジアと中東のムスリム知識人の交流を示す貴重な例である。南アジアのムスリム知識人とリダーやアルスラーンらとの直接的な接点については今後さらに調査する必要がある。それにより、西洋と東洋を結んだだけでなくムスリム同士のより広いつながりが浮かび上がることとなれば、さらに立体的なムスリムのネットワークが明らかとなるであろう。さらに、中国や東南アジア、トルコや中東において、ヨーロッパに学んでイスラーム復興を志した者がどの程度いるのか、今後より広い知識人層の解明が俟たれることとなる。たとえば、ジャマアテ・イスラミーの創設者アブル・アラー・マウドゥディーの「ジャーヒリーヤ」論や「ハーキミーヤ」の理論化を含めたイスラーム復興思想がエジプトやイランにいかに関与されたかといった問題について、今後さらに検討すべきであり、これは書評子自身の研究課題と考える。本書は雑誌出版を軸に研究が進められているが、アイケルマン氏が、イスラーム世界の言語がアラビア語だけでないことを強調しているように、「思想の翻訳」はイスラーム思想を研究する上で重要な課題ではないだろうか。

本書を通じて語られるムスリム知識人は、各地の社会状況を背景に、イスラーム復興をいかに発展させるかという工夫を凝らした。そのため地域的特性をもったさまざまな解釈が生まれている。松本論文が示すように、中国のムスリムは中国人としてのアイデンティティと、少数民族としてのアイデンティティの両方を確立させているが、南アジアにおけるイクバルが示した「完全なムスリム」は、いずれの支配からも解放された孤高の存在を目指している。中国のムスリムは「愛国愛教」を掲げ、領土的国家（watan）を非ムスリムが多数派である中国とし、ムスリム自身は中国人のなかの必要な（integral part）部分を構成していると主張する。Integral という語は、アイケルマン氏の論考においても、トルコ人の多くが、イスラームを社会的アイデンティティにおける必要な部分と認識しているという箇所と同じことが使用されているが、西洋的近代の価値が主流となっている同時代において、ムスリムが自らの存在を肯定的に評価しようとしている姿を捉えているものと考えられよう。そして愛国心を強調することで、中国人ムスリムは中国での地位を保証されるのである。この点は、子島論文で扱われているイスマール派の活動方針にも通底するところである。

愛国心を掲げることにより、中国のムスリムは抗日運動における防衛ジハードを展開したが、これも南アジアのムスリムのジハード論とは異なっている。南アジアのムスリムは、異教徒（シーク教徒、イギリス人）により支配されている点でインドがダールル・ハルブであると指摘し、反英運動を展開した。非ムスリムに支配される、という点では中国の場合もダールル・ハルブと解釈可能であるが、中国ムスリムは少数派としての地位を肯定的に捉えたのである。

最後に、近代文学の成立についても触れておきたい。アズラ氏は、『マナール』誌の影響が、マレイ語の長編小説に見られ、マレイ語の作家がイスラーム復興思想を小説に託したことを紹介しているが、このような事例は他地域でもみられるところである。西洋から近代的散文が紹介され、言文一致のなかでリアリズムを描くことで、啓蒙運動が展開されるというのは、南アジアにおいても19世紀後半に活躍したナズィール・アフマドによるウルドゥー語初の長編小説において見られる。ナズィール・アフマドの場合は、イギリス人の直接の指導を受けて啓蒙小説を書き、西洋的近代の受容を促した点で、イスラーム復興の動きとは方向性が異なるが、イスラーム世界における啓蒙的手段としての近代小説を考察することは、アイケルマン氏が示唆する包括的なメディアの研究の必要性につながる。すなわち、西洋的近代の産物をどこまで利用できるか、当時のムスリムはその問題に苦勞していたのである。アズラ論文は、マレイにおいて、雑誌媒体そのものを西洋的であるがゆえにビドア（宗教的逸脱）であると批判したり、ネクタイの着用や写真を禁忌として批判する例も紹介している。これらの批判は長編小説という手法を通じた啓蒙運動の是非を問うことにも通じるのである。19世紀まで、日常生活のどの部分をどこまで規定できるかについてのクルアーンに基づいた解釈はアフリカやトルコ、東欧、中国など地域の政治体制や社会のあり方、歴史的背景や伝統的な生活様式などによって若干の差異が認められることが不可避であった。トルコにおけるギュレン運動での女性のスカーフ着用の是非や、中国における少数派としての愛国心の表明などは、その一例である。現在では、地域や環境による解釈の差異が存在しつつも、メディアの発達によって、一地域での解釈が広く受け入れられる可能性が一気に高まりつつある。これがイスラーム改革思想のグローバル化を生んでいるのだ。『マナール』誌におけるクルアーンの再解釈が各地で共有され、20世紀半ばからのイスラーム復興運動につながったとすれば、『マナール』誌を中心としたムスリムによるメディアの再評価という同書の目的は意義深いものであることをあらためて感じる。かくも示唆に富み、今後の研究課題を提供してくれる本書は、イスラーム復興を検討する上で必読の書であるといえよう。

『マナール』は灯台を意味し、ハディースに由来する。その名の通り、カイロで発刊されたこの雑誌は、遠くの地平へとイスラーム復興の光を注いだ。それは西欧の近代と植民地主義の荒波の中でもがくムスリムにとって航路を示す道標であり、これに共鳴したムスリムは、共時的に各地でイスラーム復興の動きを目指すこととなった。

同誌をめぐる一連の動きをミクロな視点で描き出した本書の読後には、マクロな視点でイスラーム世界の存在を志向しようとした当時のムスリム知識人の息遣いが伝わってくるのである。

なお本書に収載された日本語論文の多くは、日本語の研究書として公刊されているものが少なくない。本書で興味をもたれた方は、ぜひ日本語での詳細な論考へのお目通しもお奨めする。また、『マナール』誌は *Al-Manār on CD-ROM* として京都大学 COE プロジェクトで 2003 年度に CD-ROM 復刻版が刊行されている。これにより、同誌が手軽に講読できる環境が整ったことは特筆すべき成果であろう。

アブデュルレシト・イブラヒム（小松香織、小松久男訳）1991『ジャボンヤ——イスラム系ロシア人の見た明治日本』第三書館。

王柯 2008「清国ムスリム公使の中日外交（上）」『環』 vol.33.

—— 2008「清国ムスリム公使の中日外交（下）」『環』 vol.34.

—— 2008「戦争に収斂した「回教徒」への思い（上）」『環』 vol.35.

—— 2008「戦争に収斂した「回教徒」への思い（下）」『環』 vol.36.

小杉泰 2006『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会。

小松久男 2008『イブラヒム、日本への旅』刀水書房。

小松久男・小杉泰（編）2003『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会。

子島進 2002『イスラームと開発——カラーコラムにおけるイスマール派の変容』ナカニシヤ出版。

Āzād, Abul Kalām, 1988, *Al-Hilāl*, vol.1,2,3. Lucknow: Uttarpradesh Urdu Academy.

Muslim Mosque Committee, Kobe, 1935 *The Kobe Muslim Mosque: A Souvenir Booklet issued in Commemoration of the Opening Ceremony of the Kobe Muslim Mosque, October 1935.*, Kobe & Osaka Press.

Sālik, ‘Abd al-Majīd, n.d., *Dhikr-e Iqbāl*, Lahore: Bazm-e Iqbāl.

（山根 聡 大阪大学世界言語研究センター）

---

Yoav Alon. 2007. *The Making of Jordan: Tribes, Colonialism and the Modern State*. London and New York: I.B.Tauris, xiv+214 pp.

ヨルダン・ハーシム王国は、1921年に英国委任統治の下で成立したトランスヨルダン首長国を前身としている。1946年に独立を果たした後、アラブ民族主義の隆盛や内戦、湾岸危機など、さまざまな困難に見舞われながらも、ハーシム王家は建国期から現在までおおむね安定した統治を続